

構成的グループエンカウンターを導入した PTA学年懇談会の実践

河本 肇

(2000年10月19日受理)

Practice of PTA grade conference with structured group encounter

Hajime KAWAMOTO

キーワード：構成的グループエンカウンター，PTA，懇談会

Key words : structured group encounter, PTA, conference

目 的

学校現場において、開発的（育てる）カウンセリングに対する関心が高まっている。その理由として、学校教育における治療的カウンセリングの限界によるところが大きいといっても過言ではない。田蔦（1995）は、学校現場に従来の「密室カウンセリング」を導入するのではなく、学校という場を生かした相談体制づくりの必要性を指摘している。同様に國分（1997）は、学校を病理現象をなおす病院になぞらえるのではなく、教育という発達課題を解きながら成長を援助する場であると力説している。これらのことは、ミニ・クリニック論の問題点（大野，1997）に通じるものであり、本来の学校カウンセリングは、学校のいつでも、どこでも、だれでも、すべての児童生徒に対して関わることが求められている（河本，1996）。

これらの主張はいずれも、アカウンタビリティに関わってくるものである。つまり、治療的カウンセリングは、学校のすべての児童生徒に関わっていないということが指摘できる。また、学校不適応や問題行動、つまり不登校、いじめ、非行や暴力行為などの現象をなくすことだけに囚われてしまっ

て、目標を達成することには眼が向けられていないという問題点も含んでいる。

もう1つの理由として、本来ならばそれを担うはずの生徒指導の積極的な側面が機能していないことも指摘できる。生徒指導の手引（1981）では、生徒指導には2つの側面、つまり積極的な側面と消極的な側面があるとしている。前者は人間性、人格、能力などを十二分に発揮させる「いわゆる積極的な面」で、生徒の人格あるいは精神的健康をより望ましい方向に推し進めようとする指導である。これは、すべての生徒を対象として行われる必要がある」。後者は悩み、不満などの問題について相談・指導を行い、解決を図る「いわゆる消極的な面」で、適応上の問題や心理的な問題などをもち生徒、いわゆる問題生徒に対する指導である」。ところが、生徒指導はもっぱら管理・規制のための消極的な側面だけしか機能していないのが現状である。文部省の施策においても、生徒指導における積極的な側面には目が向けられていない（文部省，1999）。そして、ことばが擦り替ったかのように、教員へのカウンセリング研修の充実、スクールカウンセラーの活用、心の教室相談員の配置などの学校カウンセリングの拡充だけが叫ばれるようになり、その中で開発的カウンセリングが

クローズアップされてきた。

ことの是非はともかく、学校不適応や問題行動に対して問題解決のための援助として、生徒指導の消極的な側面だけでなく、積極的な側面の1つのアプローチである開発的カウンセリングが、結果的には学校不適応や問題行動を減少させる近道になっていることが、学校関係者にも徐々にではあるが理解されるようになってきたことだけは間違いない。教員研修においても、治療的カウンセリングあるいは教育相談から、開発的カウンセリングあるいは育てるカウンセリングへとシフトさせようとする動き（大阪府教育研究所連盟 教育相談部会，2000；米田，2000）が見られるのもその表われといえる。

開発的カウンセリングについて、國分（1998）は構成的グループエンカウンター（Structured Group Encounter：SGE）、キャリアガイダンス、ソーシャルリレーション志向のグループ体験、対話のある授業の4つが、その領域として含まれると述べている。その中でも近年学校関係者の間でもっとも実践されているのは、SGEである。開発的カウンセリング＝SGEと誤解されるほどに、広く知られるようになってきた。SGEは、「パーソナル・リレーション（感情交流）を軸にし、これに若干のソーシャル・リレーション（役割関係）を加味したグループ体験の場を提供し、その体験を通して各メンバーの人間成長を提供する方法」（國分，2000）といわれている。

SGEの対象として、もっとも多いのは児童生徒である。教室場面だけでなく、学年であるいは入学式や学校行事の中など、さまざまな場面で実施されている。それ以外には、教師や企業での研修、あるいは保護者などさまざまな対象を挙げることができる。保護者を対象としたものでは、学級懇談会がその中心である。例えば、鹿児島県総合教育センター（1998a，1998b）では、人間関係を深めるために、あるいは家庭との連携のために、学級でのPTA活動におけるSGEのあり方が示されている。さらには、マニュアル本である「エンカウンターで学級が変わる」（國分，1996a；國分，1996b）にも学級懇談会での実践例が示されている。ところが、学年全体の保護者を対象とした分

析は、これまでのところ見当たらない。このことは、PTA活動において学年を対象とした取組みそのものが少ないためと考えられる。PTAの組織と活動について実証的に検討した住田・藤井（1995）、PTA役員経験の教育的効果を検討した明石他（1995）でも、調査項目に学級懇談会を挙げているが、学年懇談会は存在していないことから推測される。

本研究では学年懇談会という場面においてSGEを試みたい。はたしてSGEは学年懇談会においてどの程度の効果をもたらすのであろうか。学年の教師と保護者が一同に会する中で、SGEを行うことによって、教師と保護者の「つながり」を深め、PTA活動の活性化を図ることを目的とする。ところで、小楠（1992）は、これからのPTA活動のあり方として、会員が学習した結果に基づいて調査・分析し、問題（課題）点を浮き彫りにすることを指摘している。そこで、学年懇談会を実施するまでの前段階として、保護者と教師に対して学年懇談会の課題について、現状の意識をアンケート調査することによって、学年懇談会での課題に対する意識を高める試みを行う。そして、その結果を学年懇談会でフィードバックすることによって、単発的にSGEを実施する以上に課題への取組みが期待されると思われる。

方 法

対 象 公立中学校2学年保護者と担当教師。学級数は11クラス（412名）、担当教師は15名からなる大規模校であった。

実施者 この中学校に派遣されていたスクールカウンセラー（School Counselor：SC）で、筆者が実施した。

手続き 時系列に沿いながら、SCと各学級から選ばれた学年委員（11名）が行った内容とその回数を示した。

①**実施方法とテーマの決定**<5月21日～7月17日：4回>

年に1回、2学期に行われる学年懇談会について、学年委員からSCに対して依頼がなされた。話し合いを通して、講演形式ではなく参加者の相互

作用を営むという形式が決定された。そこで、SCからSGEの概要について説明が行われた。そして、SGEによる実施が提案され、了承された。

次に、テーマについて話合われた結果、「学校と家庭の子育てネットワークよいパートナーシップをとるために一」となった。これは、保護者と学校（教師）それぞれの思い、考え、意見の違いやズレを明らかにすることが、真の意味での連携や相互理解のために不可欠であり、それを通してよりよいパートナーシップを構築していきたいという思いから設定されたものであった。

さらに、参加者のモチベーションを高めるために、事前に保護者と教師にアンケート調査を実施し、その結果について当日フィードバックしながら、これからの学校と家庭との連携のあり方について語りあうというSGEについての基本方針が決定された。

②アンケート調査の作成と実施<7月26日～9月4日：3回>

保護者向けのアンケートは、9つの質問項目から構成されていた。その内容は、表1にまとめた。回答は無記名形式で、生徒を通して9月13日に配布された。また教師向けのアンケートも無記名形式であり、保護者に尋ねた9項目のうち、教師の立場の立場として回答できると考えられる5項目について回答を求めた。その内容は、表2にまとめた。保護者の回答は301名（回答率70%）、教師からは全員（15名）の回答を得た。なお、学年懇談会の案内状も9月10日に配布し、参加者を募った。

表1 事前に実施した保護者向けのアンケート内容

質問項目	内 容
1	1学期に開催された学級懇談会に出席したかどうか
2	学級懇談会に出席・欠席の理由
3	学級懇談会に期待していること
4	「学校だより」を読んでいるかどうか
5	「学校だより」を読んでいるいない人の理由
6	授業参観日以外の学校参観の自由になったことを知っているかどうか
7	授業参観日以外の学校参観に行ったことがあるかどうか
8	授業参観日以外の学校参観に行ったことがない人の理由
9	学校生活の中で、子どもについての心配ごとを誰に相談するか

表2 事前に実施した教師向けのアンケート内容

質問項目	内 容
1	1学期に開催された学級懇談会の出席者数（144人）は多いと思うかどうか
2	どうすれば学級懇談会の出席者は多くなるか
3	学級懇談会に期待していること
4	授業参観日以外の学校参観を保護者は活用していると思うかどうか
5	授業参観日以外の学校参観を保護者はなぜ利用しないのか

③アンケート調査の回収、集計と分析<9月18日～27日：3回>

アンケート調査は、9月17日までに回収され、回答について集計が行われた。その結果、学年懇談会では表1に示した9項目のうち、4・5・9番を除く6項目についてフィードバックすることが決定された。これは、学年懇談会の実施時間から考えてすべての項目について紹介する時間がないこと、保護者にとって学級担任以外について顔と名前が一致していないこともあり、最初のウォーミングアップに時間を割くことが必要と思われたからである。そして、サブテーマは学級懇談会、学校参観の2つとすることになった。また、当日の流れについてSCが作成し、その概要を説明した。ただし、詳細については、学年委員も一保護者として参加してもらうために伏せられた。

④学年懇談会の実施<10月2日>

保護者は62名、教師は14名参加し、校内の会議室において約2時間にわたって実施された。リーダーはSCが行った。

1)ウォーミングアップ

最初に、リーダーが学年懇談会のテーマ「学校と家庭の子育てネットワークよいパートナーシップをとるために一」の設定理由を説明し、当日の進行方針としてこれからのパートナーシップの方向性について参加者全員で考えていきたいと述べた。まず最初に、学年の教師紹介を兼ねてゲーム形式による教師の名前覚えを行った。そして、ぶらぶら歩き、あいさつ、握手をしながらのあいさつを実施した。そして、概ね教師1名と保護者5名を1グループとして合計13グループを作成した。そして、グループごとに他己紹介を行いながら、

親睦を深めた。

2) エクササイズ

まず、第1のテーマは学級懇談会であった。保護者については表1の質問項目1・2・3、教師については表2の質問項目1・2・3の結果をOHPを使って呈示した。これからの学級懇談会はどのようなものであればよいか、グループごとに話合った。

第2のテーマは学校参観であった。この中学校では、定期的な参観日以外にも保護者が自由に学校参観できるようになっていたが、形骸化しておりまったくといって活用されていないのが現状であった。そこで、保護者については表1の質問項目6・7・8、教師は表2の質問項目4・5の結果を呈示し、同様にこれからの学校参観のあり方についてグループで話合った。

いずれのサブテーマにおいても、保護者や教師の意識、立場や考え方についてOHPによって呈示することをきっかけとして、一定時間内に「解答」を求めるのではなく、各グループで保護者、教師各自が自分の思いを伝え、話合うことを通して、保護者同士あるいは保護者と教師の「つながり」を深めることを主眼に進めた。SCはグループを回りながら、参加者の質問を受けたり、話題の「交通整理」を行った。そのあと、各グループでどのようなことが話合われたかを、グループの代表者が順番に紹介した。このときにも、全体としての結論を出すことは一切行われなかった。

3) シェアリング

グループごとに、学年懇談会を通じて感じたことを話合った。ここでは、参加者それぞれが順番

に自分の思いを伝えることを行った。そして、SCがこの会を1つのイベントの完了として捉えるのではなく、ここから今日のテーマである「学校と家庭の子育てネットワーク」が始まるのだという意識が必要というまとめを行った。

最後に、無記名式によるアンケート調査を実施した。これまでにSGEで実施されてきた項目を参考にしながら、SCが学年懇談会用に7項目を作成し、保護者に対して5件法による評定を行ってもらった。また、学年懇談会に対する感想・意見について、保護者・教師の両者に自由記述を求めた。

結 果

直後の変容 シェアリングにおいて行ったアンケート調査に関する7項目の結果を、表3に示した。また、自由記述の内容について、保護者は表4、教師は表5にまとめた。

フォローアップ その後、学年委員と学年主任との話し合いで、11月に3日間の学年参観日を設定することとなった。しかし、PTA常任委員会に諮られた結果、時期尚早ということで見送られた。保護者の中には、この中学校ではもともと自由参観は認められているので、自主的に誘い合っこの3日間に学校参観を行った者もいた。

さらに、学年委員によって、アンケート結果と学年懇談会の模様についての報告が小冊子(B5判12ページ)として作成された。これは、学年懇談会に出席しなかった保護者のため、また学年懇談会においてフィードバックできなかったアンケー

表3 学年懇談会終了後の評定

項 目	とても そうだ	どちらか という そうだ	どちら ともい えない	どちらか という ちがう	ぜんぜん ちがう
学年懇談会に参加してよかった	51	10	1	0	0
この会を通して、何らかの気づきがあった	29	31	1	0	0
楽しく参加できた	47	14	1	0	0
他の人の意見は参考になった	48	13	0	1	0
学校や先生に対する意識が変わった	19	26	16	1	0
アンケートの結果は参考になった	26	32	4	0	0
このような会があれば、また参加したい	51	9	1	1	0

単位：人数

表4 学年懇談会に対する保護者の意見・感想

小人数の意見の交換だったので、本音とか出て参考になった。こういう機会を増やして下さい 6

本音の意見交換は楽しい 3

1学期などのもっとも早い時期に一度開催して欲しい。できれば、年3回くらい(各学期に1回)開催していただければと思う 3

先生方や保護者の方たちとのコミュニケーションが、本当に大切だと感じました。勇気を出して参観に行ってみようと思います 2

参加してよかったです 2

懇談会の新しい形で少しびっくりしたが、先生方や保護者の方々との交流の機会となりよかったと思う。先生方のアンケート内容も表示されよかった 2

楽しく過ごせました。先生の顔も名前もほとんど知らない状態でしたが、少し知ることができました。今回は懇談という意味とにかにして参加するか(できるか)という内容でしたが、次回はもう少し内容をふくらませて本音で話したいです 1

この雰囲気で学級懇談会ももてたら、担任の先生とも打ち解けて話せるのではないかと感じました 1

グループづくりの前段階でウォーミングアップがよかった。相手の名前も覚えることができた。意見は個人的にはあまりいうことがなかった 1

参加前は少し気が重たかったが、参加してとても有意義な時間がもてたと思います。何か行動に結びつけばと思います

会の始めの「あいさつゲーム」は効果があったと思う

質問の趣旨とは違うかもしれませんが、学習参観もできるとおもしろいなと思っています。昨年、上の子の学年でとても楽しい授業があり、思わず手を挙げそうになったことがあるので

親としてあるべき姿、親としての義務など、受身の懇談会ではなく辛口の意見が欲しかった

考えていることは、どの親の方も同じだと思った

できれば各先生の意見も聞きたかったです

担任以外の先生と話ができてよかった

父兄参加でも、今日もお母さん方ばかりだったので、お父さんやその他家族も参加できる雰囲気づくりをもう一歩現実的な問題について話し合いをしたかった

自分はいあまり意見をもたない人間ですが、他の方の立派な考えを聴いてフムフムと納得できてとてもよかったです

自分の子どもだけではないのだということがわかったので、よかった気がして少し安心した

初めて会った人達ばかりであったが、楽しく話し合えたことがよかった。もっとたくさんの人達と同じように触れ合えたらよいと思う

とても楽しかったし、意見もいっぱい出てよかったと思う。ただ、今日出た意見が実現するのは、学校側の働きかけがなければ無理だし、どこまでこれから親と一緒に(子どもたちもかな?)が関わっていけばよいのか(一般も含め役員・PTAなど)難しい

数字は記載した意見・感想以外に、類似したものの数を示す

ト結果を紹介すること、そしてこれからの学級懇談会や学校参観のあり方についての話し合いの概要を呈示するためのものであった。そして、12月の個別懇談会の席上で保護者に配布された。2つの

サブテーマについて、小冊子にまとめが載っているので、それを紹介する。

学級懇談会について 「アンケート結果から、保護者も先生も少しでもわかり合いたいという気持

表5 学年懇談会に対する教師の意見・感想

本校に初めての学年懇談会でしたが、保護者のみなさんの子どもにたいする温かい思いを改めて知ることができました。学校開放は、私たち教員にとっても自分自身を問い直す1つの学びの場ですので、いつでも来校いただき、情報交換をしていただきたいと強く思っております

身体も動かす活動は、リラックスできてよかった。時間があっという間に過ぎ、充実していたのではないかと思います。保護者の方と楽しくたくさん話すことができてよかった

学級懇談会や学校開放の方法などについて話し合えたことで、保護者の方も自分自身の問題として捉えることができたのではないかと。今後の活動の参考になるのではないかと思います

大変楽しく参加させていただきました。このあと、学級懇談会が始まれば、きっといい話し合いができたのではないかと思います。みなさん、ざっくばらんに話し合えたと思います。自分も教師というより親に近い立場で参加していたように思います。今日出た意見をいろいろと参考にしながら、懇談会・自由学校訪問に取り組んでいければいいですね。いろいろな問題を学級でも抱えていますが、保護者の方々の意見を出し合える場がまたあるといいと思います

たくさんの保護者の方々に来ていただき楽しく過ごさせていただきました。大変熱心な話し合いに感動しました。これからも是非共に話し合う機会を多くもっていただければと思います

始めのあいさつゲームはかなり緊張して気が重かったですが、グループになってからの話し合いは、話しやすく、相互に意見が出しやすかったように思います。それぞれのグループからの発表も、自分たちのグループが気がつかない内容もあり、深まった話し合いになりました。保護者の方と共に見つけた新たな方向や対策がこの後具体化していくように、校長・教務主任等に伝え、お願いしていけたらと思っています

楽しく参加させていただきました。お母さん方と本音でお話させていただく機会がもててよかったです。学級懇談会にご期待なさっていることなどを聞き、今後の懇談会で生かせることは生かしていきたいと思えます

本当のわかりやすい話、親御さんの本音のところがわかったような気がしました。会の始めと終わりではかなり違い、心地よい疲れが残りました

保護者の方と楽しく触れ合うことができました。特に、グループの5人の方は、自分の学級におられない保護者だったので、より一層よかった。懇談会という硬いイメージがあるので、このような会が続けばよいと思った。学年の絆を深める機会であった

今日のような和やかな話し合いの中で話し合いの場がもてたことは大変有意義でした。意見の中にもあったように、最初の学年懇談会など今日のような機会がもてたら、保護者の方々と先生とのコミュニケーションもとりやすくなると思います。ゆっくりでも、少しずつでも、家庭と学校とがスムーズなパートナーシップを築いていけるよう改善、努力していけたら……と考えます

中身の濃い学年懇談会になったと思います。やはり、すぐ懇談会に入るのではなく多少打ち解けあってから話し合いは、有効であることが勉強になりました

楽しい会だったと思います。本音のいいあえる会はなかなかありません。次の会の運営を考えてしまいました

いろいろな方々と触れ合えて、またコミュニケーションができて大変有意義でした

とても楽しい2時間でした。和気あいあいとした雰囲気の中で、自由に意見をいあうことができました。参考になる意見もたくさん出され、学級懇談会の持ち方等、今後に生かしたいと思えます

ちを強くもっていることがわかりました。信頼関係を築くということは、双方の心がけ次第でできることだと思うので、いろいろな機会に、共に話し合っていく、保護者と先生が信頼し合える関係になっていきたい。そのためには、学級懇談会を大いに利用すべきだと思います。しかし、現在の回数では少なすぎるので、コミュニケーションを深めるためにも、もっと回数を増やしたらよいと思

います」

学校参観について 「365日いつでも学校参観できるシステムがありながら、ほとんど利用されていないのは残念です。まず第一歩として、期間限定で実施してはどうでしょうか。そして、先生と保護者が共にコミュニケーションをとり、お互いわかりあえば、自然に解決する問題もあるのではないのでしょうか。それぞれこころの壁を取り除き、

開かれた学校、開かれた学校参観を目指したいと思えます」

さらに、これまで年に1回しか実施されていなかった学級懇談会が、この学年のみ2月にも実施された。そして、3月末をもって、学年委員はその任を終えた。

考 察

学年懇談会を1つのきっかけとして、今までとは違った保護者同士、さらには教師との人間関係をめざすという点において、SGEを導入した試みは、懇談会の最後に実施した結果からきわめて高い満足感の得られたことが確認された。このことは、12月に配布された小冊子のあとがきに記された内容からも、学年懇談会の様子がうかがえると思われる。「懇談会を終えた時、出席して下さった先生方と保護者の皆さんの間に何とも言えない連帯感が生まれたように感じました。この連帯感こそが、『学校と家庭の子育てネットワーク』のための第一歩のような気がします。……この『よいパートナーシップ』をとるためには、まず、お互いが信頼し合い、いろいろな機会に、共に話合うことこそが大切だと思います。……」。

さらに、それだけに留まることなく、結果としては実施には至らなかったが、学校側からすれば「予想以上の先生と保護者の団結」が、複数日の学校参観という話、あるいは2月の学級懇談会に結びついたことから、学年懇談会におけるSGEの実践がある一定の成果が得られたことは明らかである。

今回の学年懇談会のキーワードとして、表4・5に示した自由記述から「本音」ということばを読み取ることができる。逆にいえば、従来の懇談会では「本音」での会話ができない状況にあったことを示すものである。この中学校では学年懇談会として、従来は外部講師による講演会、あるいは教師と保護者がグループになったの茶話会が実施されてきた。このうち、前者については「本音」が出ないのはいままでもない。しかし、後者と今回について、形式そのものはことさら異なるものではない。手続きの中で、ウォーミングアップや

シェアリングが入ったか入らなかったかということが、その違いとして指摘できる程度であろう。したがって、自由記述の中にも、ウォーミングアップについての指摘がなされていたことはうなずける。SGEにおいて、ウォーミングアップ、エクササイズ、シェアリングという流れの重要性を確認することができる。

一方、教師からも肯定的な回答が多く示された。保護者と同様に「本音」の必要性を指摘しているが、やはり教師という立場の違いが鮮明である。つまり、今後の学級懇談会の運営にどのように生かすかという視点で参加していたことが特徴的である。

全体的には高い評価が得られたが、表3のうち保護者の「学校や先生に対する意識が変わった」という項目については、他の項目に比べてポジティブな回答傾向にシフトしていないことが示された。このことは、これまでの保護者と学校との心理的距離の大きさを如実に表しているものである。保護者と学校との連携を阻害する要因を分析した岩永・佐藤(1992)は、6つの因子を抽出している。そして、「親の利己的態度」、「対立回避」、「協力の機会の欠如」、「学校・教師の閉鎖性」、「生活上の制約」、「専門職への依存」の順に強く意識されていることを明らかにしている。

このうち、「親の利己的態度」は、保護者は自分の子どものことだけしか考えていない、あるいは子どもの教育を学校に任せすぎ、学校のことに関心、という項目から構成されている。今回の学年懇談会に出席した保護者は全体の約15%であり、学校、あるいは教育に対して問題意識がきわめて高い集団といえる。そのことは、学年委員と共に活動しながら、さらに当日の会の進行においても肌で感じられた。それ以外の因子については、本研究でも当てはまるものと考えられるが、保護者と学校との連携の阻害状況を打破するための1つの方法として、SGEは有効な機能を有しているといえる。

この試みについて、必ずしも問題点がなかったわけではない。第1に、学年懇談会に参加した保護者は限定されていたことである。第2に、パートナーシップというテーマといえども、実質的

には保護者が主導的に運営を進めざるを得ず、学校の仕事は文書等のいわゆる「検閲」だけであり、学校側のPTAの活動に対する積極的な理解が見られなかったことである。第3に、学年委員の長期間にわたる過剰なまでの献身的な活動がなされて、ようやく実施にまでこぎつけたことである。これらはいずれも、これまでもPTA活動の問題点として指摘されていること（小楠，1992）である。このような問題点をクリアーしながら、SGEをどのようにPTA活動に組み込んでいくかは今後の課題であろう。

引用文献

- 明石要一・高野良子・小谷教子・西成田道子・藤田房子・保村純子 1995 PTA役員経験の教育的効果の分析 千葉大学教育学部紀要 I 教育科学編, 43, 75-104.
- 岩永 定・佐藤義彦 1992 親の学校教育参加に関する調査研究 鳴門教育大学研究紀要（教育科学編）, 7, 199-214.
- 鹿児島県総合教育センター 1998a 人間関係を深める学級PTAのもち方—構成的グループ・エンカウターの活用を通して— 指導資料 教育相談, 104, 1-4.
- 鹿児島県総合教育センター 1998b 家庭との連携—学級PTA活動を中心に— 指導資料 教育経営, 29, 1-4.
- 河本 肇 1996 学校カウンセリングにおける担任の役割 教育相談の手引, 富山県総合教育センター, 15, 51-72.
- 小楠 敏 1992 PTA活動の基礎的あり方—児童・生徒の健全育成を目指して— 横浜市教育センター教育論叢, 14, 95-107.
- 國分康孝（監修）1996a エンカウターで学級が変わる 小学校編 図書文化社
- 國分康孝（監修）1996b エンカウターで学級が変わる 中学校編 図書文化社
- 國分康孝 1997 育てるカウンセリングの意義 國分康孝（監修）スクールカウンセリング事典 東京書籍
- 國分康孝 1998 「治すカウンセリング」から「育てるカウンセリング」へ シンポジウム治すカウンセリングから育てるカウンセリングへ カウンセリング研究, 32, 85-98.
- 國分康孝 2000 育てるカウンセリングとしての構成的グループ・エンカウター 國分康孝（編）続 構成的グループ・エンカウター 誠信書房 Pp.3-13.
- 文部省 1981 生徒指導の手引（改訂版） 大蔵省印刷局
- 文部省 1999 生徒指導上の諸問題の現状と文部省の施策について 文部省初等中等局中学校課
- 大野精一 1997 学校教育相談—理論化の試み— ほんの森出版
- 大阪府教育研究所連盟 教育相談部会 2000 みんなが使える学校カウンセリング読本 箕面市教育センター
- 住田正樹・藤井美保 1995 PTAの組織と活動に関する実証的研究 九州大学教育学部紀要（教育学部門）, 41, 111-140.
- 田島誠一 1995 密室カウンセリングよ どこへゆく—学校心理臨床とカウンセリング— 教育と医学, 43, 408-415.
- 米田 薫 2000 構成的グループ・エンカウターを教育センターが取りあげたわけ 國分康孝（編）続 構成的グループ・エンカウター 誠信書房 Pp.334-336.